目次

2021.9

■ 教育の内部質保証のためのIR
高等教育研究センター　准教授　李敏
■ 令和２年度学内版GP成果報告
キャリア教育・サポートセンター
講師　勝亦達夫
■ 平野センター長退任のご挨拶
■ スタッフからひとこと

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 高等教育研究センター

教育の内部質保証のためのIR

前回のニューズレター（2021年6月号）では昨年度から開始した「点検・検討の記録」をめぐり，それの教育の内部質保証における位置づけ，およびこれに関わる疑問について詳細な説明を行いました。本号では引き続きこの「点検・検討の記録」における最も重要な情報である「学生による授業アンケート」の関係項目をはじめ，GPAに関する学務情報，「教員による授業アンケート」の項目と合わせながら，これらのいわゆるIR（※1）情報を教育の内部質保証のためにいかに活用するのかについて具体的に説明します。

まず，「点検・検討の記録」の中では，「学生による授業アンケート」の下記の項目及び該当科目のGPAの記載と分析が求められています 。

質問2.
この授業が掲げた目標に，あなたは到達しましたか。（到達度）
質問7.
あなたは，この授業の一連の経験を通して，達成感を得ましたか。（達成感）
質問5.
この授業のために，あなたは一週間あたりどのくらい授業外で学習しましたか。（授業外学習時間）

こうしたデータからどのような情報が読み取れるか，またどのように教育の改善に活かせるのかについて，ある科目を例として一緒に見てみましょう。

「学生による授業アンケート」
科目名：〇〇〇
回答数:19
履修数:51
回答率:37.3%

	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない	合計
Q2 到達度	4	13	2	0	0	19
	21.1%	68.4%	10.5%	0.0%	0.0%	100.0%
Q7 達成感	5	12	1	1	0	19
	26.3%	63.2%	5.3%	5.3%	0.0%	100.0%

	3時間以上	2時間以上3時間未満	1時間以上2時間未満	30分以上1時間未満	30分未満	合計
Q5 授業外学習時間（一週間あたり）	0	1	7	10	1	19
	0.0%	5.3%	36.8%	52.6%	5.3%	100.0%

GPAに関する情報：

秀	優	良	可	不可(D)	不可(F)	単位取得率	科目GPA	GPの中央値
51.1%	20.0%	17.8%	2.2%	0.0%	8.9%	91.1%	3.23	4

該当科目の担当「教員による授業アンケート」
Q1この授業が掲げた目標に，受講生は到達したと思いますか。　　回答：どちらでもない

学生の回答を見る限りは，授業に対する到達度と達成感がかなり高いということがわかります。また，GPAに関する情報を見てみると，「秀が50%」であり，「優が20%」であるというように教員が学生の学習についても高く評価しています。これらのIR情報から，極めて成功した科目であるということが読み取れます。

しかし，他の項目と合わせて見てみると，データの間のズレが感じられます。例えば，受講生の58%が一週間あたりの授業外学習時間が1時間以下に留まっているので，学習の量は十分と言い難いです。特に注目していただきたいのは「教員による授業アンケート」の回答です。Q1「この授業が掲げた目標に受講生は到達したと思いますか」と聞いたところ，教員が「どちらでもない」というややネガティブな回答となっています。これは学生の認識とズレがあるだけでなく，半数以上が「秀」であるという教員の成績評価とは全く印象が違います。したがって，質保証の観点からみれば，この科目に対して，①授業達成目標をより明確にすることと，②成績の評価基準を明確にする，などのような改善の余地があるのではないかと思われます。

IRに関する二つの使い方

このように，IRデータは教育の質保証の実践の中で2通りの使い方があります。一つ目は，上記のような3種類のデータをそのまま教育の成果と見なし，大学の評価，教員の評価の重要な指標として用いる方法です。実際，欧米諸国における大学・教員に関する評価の中で，「学生による授業アンケート」と学生の成績が重要な評価指標として重要視されています。しかし，授業アンケートの結果を向上させるために，教員が成績を甘く評価することや学生に迎合した授業を進める等のような質保証の本来の目的に反する事例が多々報じられています。大学の成績の客観性を保証するために，例えばイギリスでは「学外試験委員制度」（external examiner system）を実施しています。これは，学外の試験委員が直接試験の採点に参加することや，プログラムの内容，試験問題の内容を確認し，教員や学生の声に傾聴することを通して，成績評価の客観性と権威性を保証する制度です（安原，2009）。確かにこのような取組みは評価の客観性を向上したことには成功しましたが，実施するためには膨大なコストがかかるので，イギリスより高等教育規模の大きい日本では容易に普及することができません。

二つ目のIRの使い方は，IRデータを通して教育や研究の問題を発見し，最終の目標に向けて調整するためのツールとする方法です。信州大学ではこの方法が採用されています。前回のニューズレターの記事でも説明したように，「学生による授業アンケート」で回答した学生の到達度と，教員が付けた到達度，つまり科目GPAの2つが整合しているかどうかを点検することを通して，「カリキュラムの中の分野等の授業群について，それぞれの授業のつながりと教育成果の受け渡しがうまくいっているかどうかを点検します」。このように，IRのデータはあくまでもDPを実現するための道具にすぎず，各部局の教育を評価するための資料ではありません。そのため，一つ目の使い方のようにきれいなデータを取得するよりも，むしろ現状を表わすようなデータのほうが望ましいです。上の例でもわかるように，各種IRデータを並べるだけでも数多くの情報が読み取れます。それらの情報をもとに，既存の問題を炙り出し，DPを実現するために絶えず調整する作業を行います。このプロセスこそ，内部質保証のPDCAのサイクルと言えるでしょう。

ただし，このPDCAを回すためには，正確なデータを得ることが前提です。例えば，上記の事例とする科目の回答率は残念ながら37.3%しかないので，回答が偏っていると言わざるを得ません。したがって，「シラバスで，最後の授業の15分を授業アンケートのために確保しておく」という方法で，最後の回の授業出席者は全員回答するように努力しましょう。

【引用文献】安原義仁（2009）「イギリスにおける高等教育の質保証システム」
羽田貴史・米澤彰純・杉本和弘（編）『高等教育質保証の国際比較』東信堂, 225-237 頁。

※1:IRとはInstitutional Researchを指します。 高等教育機関が自機関に関する情報の一元的な収集，調査及び分析を実施する機能。教育や研究に関する様々なことについての計画立案，政策形成，意思決定を円滑に行うことを支援するための情報提供を目的としており， IR を専門に担当する部署や職員が置かれることもあります。（独立行政法人大学改革支援・学位授与機構（2021）『高等教育に関する質保証関係用語集』第５版 ）

（高等教育研究センター 准教授　李敏）

令和３年度前期の「教員による授業アンケート」を未回答の方は，eALPS時間割にアンケートフォームへのリンクを貼ってありますので，９月中にご回答いただきますようよろしくお願いいたします。

令和２年度学内版GP成果報告 vol.2

前号に引き続き，令和２年度学内版GPに採択された取組みをご紹介いたします。
令和２年度は，「受講生の主体的学修を促す工夫」，「受講生の達成感（＝自己効力感，等）を上げる工夫」に該当する教育取組を応募対象とし，9件が採択されました。

キャリア教育・サポートセンター　講師　勝亦 達夫
ポートフォリオ（学びの履歴）を用いた学びの精緻化と
FLIP（フューチャー・ローカル・イノベーター・プレゼンテーション）の開催

1. 活動概要と目的

キャリア教育・サポートセンターでは，学生が早い段階からキャリアについて考え，なりたい自分を目指して専門を深め主体的な学びに取り組めるよう，インターンシップの機会やキャリア教育を推進しています。その機会として，インターンシップを体系化し，目的や学びたいことに合わせた様々な社会との交流の機会を提供しています。

平成30年度から学内版GPに採択いただき，インターンシップに参加する前後のマインド形成と成果の充実を促すインターンセミナーを実施してきました。その中で，取組達成の可視化のために「インターンシップ・ルーブリック（評価指標）」を開発し，事前学習の段階からチェック表として活用でき事後学習の際にも自己評価として利用できる指標を整備しました。令和元年度からは，実践型体験プログラムとして「課題解決インターンシップ」を実施し，主に全学横断特別教育プログラムのローカル・イノベーター養成コースの学生をモデルケースに，試行しました。一言でインターンシップと言っても様々な内容・目的があり，その目的が曖昧なまま実施していても学生・企業双方が求める結果にならないと考えました。様々な形式や内容のインターンシップ・プログラムを，スキルや能力の観点および学習目的や参加者の状況に併せて，企業・学生・教員が共に考えるコーオプ教育型の就業体験プログラムを模索し体系化を進めてきました（図1）。

図1　インターンシップの体系化

Step1.では，低年次から企業と交流する機会を持つことが，「働くことを知る」ことやインターンシップにつながると考え，社会人と対話する「しごとーく」や「大しごとーく」の企画を実施しています。どの学年でも参加しやすく，多様な仕事や業種を短時間で知ることができ，多くの会社や業界の人と話す機会となっています。より実践的な活動をしたいと考える学生向けにStep3.の課題解決型のインターンシップを整備しました。実践的な地域・企業課題に取り組み，自らが解決策を考え，提案に留まらず実際にアクションし，改善点や発展のポイントを評価することで分析力や課題設定力の強化を図っています。学生の関心と企業や地域課題をマッチングし，セミナーを通じて課題設定と企画書の作成を課します。

2. 課題解決インターンシップの事例とキャリアレポート

農学部の竹口美咲さんは，伊那市役所や市内の洋服店をインターンシップ先として活動しました。「サーキュラーエコノミー（循環経済）」というテーマに着目し，古着を循環するという課題に取り組みました。家に着ずに眠っている思い出の詰まった洋服をシニア世代の方々から譲ってもらい，自身が中継役となって学生の世代に繋ぐ活動を実践しました。服の提供者を見つけるため，伊那社会福祉協議会等の協力を得て呼びかけ，2週間で80着もの洋服を集めました。当初服の所有者と譲り受ける学生との交流を企画していましたが，新型コロナウイルスの感染拡大のため予定していたイベントが中止になってしまいました。そこで別の方法を企画しマッチングをするなど，変化に対応し多くの体験をしていました。

このインターンシップでは，学びの履歴を記録・管理するツールとして「キャリアレポート」を作成することとしています（図２）。課題設定・企画・調整の段階的学びを実施するにあたり，活動ステップごとに記録を残します。半年から一年間保管したデータを読み返し，過去の自分と現在の自分とを比較し，成長した点を評価できるようにします。受け入れ先からのコメントもあり，改めてこれからのキャリアの目的・目標を設定する機会とします。

図2　農学部・竹口さんのキャリアレポート

3. 学びの成果を伝えるFLIP（フューチャー・ローカル・イノベーター・プレゼンテーション）

キャリアシートの作成からelaboration（自分で自分に説明できるようにする）し，さらに他者へ伝える機会としてFLIPを設定ました。課題解決インターンシップを始め，その他のインターンシップや課外活動を含めた学生の主体的な活動を発表し，学生と企業等が交流する機会としています。また，先輩学生の主体的な取組みを後輩が聞くことにより，目標像を具体的にする機会になり先輩と後輩学生の意見交換によってプログラムが引き継がれ，人材の循環を起こすことを期待します。また，発表する学生自身も自分の体験から，経験談を伝えることで学びの定着を促します。企業や自治体にとっては，今後課題解決型のインターンシップなどを検討している場合にはモデルや先行事例を知る機会になります。令和2年度は，2021年3月18日にFLIP2020を，オンラインを併用して開催しました。残念ながら，感染症拡大防止のためオンラインとなりましたが，学生の成果を発表し合い，社会人や講師の先生方からも評価を頂く貴重な機会となりました。

FLIP2020の様子（2021年3月18日）

4. 今後にむけて

3年間の取組みを経て，インターンシップにおける教育的サポートの素地ができてきたのではないかと考えています。これらを継続的に実施しながら，学生や企業の皆さんとともに，双方にとって達成感を実感できるインターンシップを，実施していきたいと思います。

平野センター長退任のご挨拶

本年9月末をもって高等教育研究センター長を退任いたします。2015年10月の着任以来，センター教員や学務部学務課職員，各学部教務担当の教職員の皆様の力をお借りして，センター長を６年にわたって務めることができました。お世話になった皆様に，心から感謝申し上げます。

この6年間，教育の質保証，中期計画，教学IR，FD，学内版GPなど多岐にわたるセンター業務に関わらせていただきました。これら業務は単独ではなく，すべて「教育の内部質保証の確立」に向けた取組みに収斂されます。３つのポリシー（DP・CP・AP）の見直し，シラバスガイドラインの改訂，成績評価方法・GPAの取り扱いに関する課題提示，学生・教員による授業アンケートの実施，教育の質保証概念図の策定，点検・検討の記録の導入等，本学教育の内部質保証の確立に向け，センター会議等で熟議を重ねて企画立案し，教務委員会や学部との懇談会を通して周知を図り，FDや学内版GP等で理解を深める努力をしてきました。それらの成果やプロセスは，認証評価・第3期中期計画の報告・第4期中期計画の策定に反映されました。センター長としての力不足を実感する時も多々ありましたが，私にとって新鮮でやりがいのある仕事をさせていただいたと思っています。

第4期は，教育の内部質保証の実質化が問われます。これまで積み上げてきた取組みを基に，さらなる改革が求められます。新たなセンター長にバトンを渡しますが，今後とも高等教育研究センターの取組みへのご理解とご協力をお願いいたします。

（高等教育研究センター長　平野吉直）

スタッフからひとこと

本年４月に学務課に配属されてから，あっという間に半年が経とうとしています。信大を卒業して以来4年ぶりに，地元長野県に帰ってまいりました。高等教育研究センターの事務担当として，微力ではございますが，センターの取組みに貢献できるよう，引き続き精進してまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（学務課教務グループ　西村香奈子）

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 高等教育研究センター
■〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1
■TEL：0263-37-2427（担当：学務部学務課教務グループ）
■MAIL：campus-rche@shinshu-u.ac.jp
■URL：http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/
こちらのQRコードからご覧いただけます⇒